

# 活彩!保健大学だより

AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

創刊号/平成12年3月1日発行 青森県立保健大学広報誌



左から管理図書館棟、教育研究B棟、講堂

## CONTENTS

創刊号に寄せて/新道幸恵学長挨拶…………… 1	海外調査レポート…………… 13
副学長及び各学科長挨拶…………… 2	青年の船体験記…………… 14
主任教授、学生部長挨拶…………… 4	大学祭を顧みて…………… 15
図書館長、研究研修センター長挨拶…………… 5	公開講座開催実績…………… 16
研究開発課長、研修科長挨拶、国際科長挨拶…………… 6	学会開催案内…………… 17
保健大学ユニフィケーションについて…………… 8	伊原勝雄先生のこと…………… 18
大学事務局紹介…………… 9	委員会記録…………… 19
開学以来の主な行事…………… 10	編集後記…………… 20
海外便り…………… 12	



[学長挨拶]

## 創刊号に寄せて



青森県立保健大学学長

新道幸恵

ミレニアムの新年に本学の広報誌を創刊できることは、とても意義深く、喜ばしいことです。

本学は、ヒューマンケアの提供できる保健、医療、福祉の人材育成を目標にした大学として、昨年4月に開学以来、合宿ガイダンス、開学記念式典、オープンキャンパス、大学祭、公開講座、健康科学研究研修センターの研修会、交流センターの開設などの行事を行ってきました。これらの行事は、本学が、主体的な学習者を育成し、地域に開かれた大学として発展していくための基礎づくりにも繋がるものとして、教職員が相互に連携協調して取り組み、また、時には学生主体の活動として取り組んできました。

本学は、開学したばかりであるということからその活動の主眼は、大学の理念の実現に向けて、軌道に乗せることに置くこととなりますが、将来の発展を目指した活動も重要であると考えています。従って、年毎に、教育・研究活動のみならず、地域社会への貢献を視野に入れた社会活動への活動の幅を広げていくことが予想されます。

教育活動としては、今年4月には在校生が1年生と2年生合わせて320名になりますが、新たに、科目等履修生を受け入れることを決め、本年3月から募集を開始することに致しました。これは、看護、理学療法、社会福祉の資格のあるなしにかかわらず、本学が開設している科目の履修に興味を持っている方を受け入れて、履修条件を達成した方に単位を授与するという制度です。この制度が、実践の場の方々と、本学の学生や教職員が本学キャンパスで交流する機会を作り、実践と教育の相互連携の円滑化に寄与するものとなることを期待しています。

また、大学院を、平成15年4月に開設する事を目標に準備を始めています。本学の健康科学部に

看護学科、理学療法学科、社会福祉学科の3学科構成であるという特性、言い換えれば、これからのケアの時代において、相互連携の要の役割を担う専門職を育成する大学としての特性を生かした大学院にしたいとその基本構想を検討中です。

研究活動としては、教員の個人研究費に加えて、特別研究費を設けて、教員の研究活動の推進を奨励しています。個人研究費は、各教員のこれまでの研究の継続や新たな研究の発展のために有効に使われることを期待しています。特別研究費は、本学の健康科学部における学科を越えて、専門の異なる教員による共同研究や地域の保健、医療、福祉の分野で実践活動をしておられる方々との共同研究、あるいは青森県の保健、医療、福祉の向上に寄与する研究等を奨励することを目標に設定しています。この特別研究費の配分は、その主旨から学内教員を対象にした公募を原則としています。

学生、教師、環境が、教育の基本的な3要素であり、本学の発展に繋がる良い教育を行うためには、この3つの要素がバランスのとれた状態であることが望ましいと考えています。それらは、新しく、快適で、設備の充実した学習環境に加え、研究に裏付けられた専門的な内容をわかりやすく、興味豊かな授業として展開する教師の努力と、学生の意欲的で主体的な学習態度によって形成されるでしょう。

この広報誌が本学の教職員、学生及び本学関係者間のコミュニケーションの場、あるいは交流の広場としての役割を担って、県民に親しまれる大学に発展することへの橋渡しになることを期待します。

## 本学の教育が目指すところ

副学長  
吉岡 利忠

保健、医療、福祉の幅広いフィールドにおいて活躍するスペシャリストを育成し、輩出することが本大学の目指すところである。

大学運営を円滑に進めるための方略については、多くのスタッフがこれに係わり、早くも一年が過ぎようとしている。1学部3学科を有する大学であるが、しっかりとした足跡を残しながら進んでいるように感ずる。

この4月から開始された第一期生に対する教育にしても同様である。ライフサイエンスにおける学問、教育、研究は系統的にしかも着実にその基盤を築きながら前進していかなければならない。この分野における教育については、研究者による多くの議論の結果、体系化された最も充実した教育方法が形作られつつある。教育目標分類学、タキソノミーというのがある。この中には、認知領域(知識)、情意領域(態度、習慣)そして精神運動領域(技能)の3種類の領域が施定されており、この全てをもって本学の教育が進められつつある。かつてその現場であったような教育者主体、学生にとっては受動的な、大人数対象の教育というのではなく、能動的、学生主体、問題提起・問題解決型、少人数制の教育方法がとられるゆえんである。すなわち、単に知識を与えそれを思い出させることだけではなしに、その状況、状態を推測し、理解し、そしていかに応用、対応するかという姿勢を身に付ける教育である。

大学広報には大学がこの1年間歩んできた全てのイベントが記載されている。教育はその全ての項目に深く関与すると考えられ、敢えて記載してみた。

“病気を診ずして病人を診よ、という座右の銘が

ある。また全人的医療がなされるべき、と言われて久しいが、保健、医療、福祉に携わる人材を形成するには教育者、学習者とも真摯な態度で臨まなければならないと感じている。

本大学が次の1年、そしてそれ以降、確実に躍進することを期待し、大学広報誌創刊号の挨拶とする。

## 学生・教員の個性尊重と チームワーク

看護学科長  
中村 恵子

青森県にとり待望であった県立保健大学看護学科を開設することができたと伺っています。しかし、国内では看護系の大学が急激に増加し、76校になりました(平成11年度現在)。その中でも、ひと際輝いている大学の一つが青森県立保健大学健康科学部看護学科であろうと自負しています。カリキュラム構成はもちろんの事、教授陣は現在日本で活躍している第一人者を擁していることです。看護関係や出版の方々にお目にかかる、青森から何かが起こるのではないかと楽しみにしています等と青森県立保健大学は県内外から期待されていることが伺われます。

文部省も看護の大学が医療関係人材の育成として、学生の目的意識を助長するカリキュラムであるような工夫を提唱しています。また、臨地教授等制度や病院・施設など実習場所と連携を密にすることを積極的に推進して欲しいとの見解を提示していますが、本学はこのような点にもいち早く着手しています。

学生101名は入学以来一人も欠けることがなく、講義・演習・体験学習にと苦しみながらも自主的・目的的な学びをしていることが4年後そして社会人となって実を結ぶことが約束される事でしょう。教員も教育に研究にと正に寸暇を惜しんで活動し



ている姿は頼もしく感じられます。ともすれば、このような環境で対人関係が難しくなりがちですが、我が看護学科は教員各々の専門性、個性を重視しながらもチームワーク良く、他学科に比べ対学生比が多いにも拘わらず、実に丁寧に学生に対応しています。

教員、学生の個性を大切にしながらチームワークを重視し、看護の基礎である人間としてのバランス感覚を養える学科でありたいと、常日頃考えています。

## 接着剤の役割を期待して

理学療法学科長  
伊藤 日出男

学内広報誌の創刊、おめでとうございます。

青森県が当初構想した看護単科大学から発展して総合的な保健大学を目指したことは、今思うと卓見でした。以来、私達は「専門職の教育は専門職の手で」を合言葉に、多くの人々のご協力を得て遮二無二突っ走ってきたように思います。

現在は、狭い医療の枠から飛び出して、地域社会で多くの人々と協力しながら主体的に仕事のできる理学療法士が求められる時代となりました。本学科では、まさに時代を先取りしたカリキュラムを編成し、優秀な教員スタッフと設備が揃ったと自負しています。

しかし、将来に対して楽観視している訳ではなく、もっと理学療法を社会に啓発し、結果として後輩の職域を広げることが、これからの業務だろうと考えます。各専門職の接着剤の役割を本誌に期待し、将来のご発展をお祈り致します。

## 初年度の冬に思う

社会福祉学科長  
三栖 郁子

今年、青森へ来て2年目の冬を迎えることができました。昨年はまだ開設準備室で、学生さんもいなくて、大学生活が始まらず、大学教職員として青森の雪景色を見ることはできませんでした。第1期生を迎えて、大学教職員・学生すべてが揃う今年の冬は、多くの仲間たちと共に、この青森の雪を見ることができました。同じ雪なのに、若々しい学生さんと共に見る雪は、とても暖かく何やら賑やかで楽しい景色になりました。やはり、「共に」生き、共通の目的をもった者同士の世界は活気があるものです。隣にさみしい仲間がいたら、声をかけ、この冬を乗り越え、また、生命世界の仲間と共に春を迎える。そして生命の息吹を感じることができるのが青森の良さです。

さて、この大学は、日本の将来を見ずえて、今後、多難ないくつかの関門をクリアしなければなりません。キーワードは、やはり「少子・高齢社会」です。少子・高齢化に伴う諸問題は、いずれにせよ一過的なものではなく、長期的に多くの国々が共通に抱える問題です。この日本と世界が確実に直面するはずの重要な関門こそ、将来の人類のありようを規定するものなのです。私達がめざす共通の目的こそ、この人類の間に直面する難問であり、本気で取り組むだけの重みのある課題です。私達はこの課題のために、共にここに集まった仲間として、志を共にする同志として、第1年目を歩き始めました。この「初心」を忘れず、人類全体の問題に挑むという気概をもって、一歩ずつ歩む、そうした充実した世界を創り上げてゆきたいと思います。



## 豊かな人間形成を目指して

人間総合科学科目  
主任教授  
赤坂 和雄

人間総合科学科目は学部学科の共通科目で、人間として、かつ総合的な判断力を身につけ、豊かな人間を作り上げていくことを目的とした最も重要な科目群である。最近は色々な分野において、ややもすると専門性に走りがちで、人間としての本来の姿を見失ってしまう傾向が強い。そして社会的にも色々な問題を引き起こしているのが現実である。人間総合科学科目群は色々な具が、だしと適度の塩加減、スパイス等でおいしい料理に仕上がるのと似ている。一見専門とは異なる科目群であるかのように思われるが、これらの科目群で学んだ知識が感性豊かで円熟した人間を作ってくれれば私達は信じている。

人間総合科学科目の大きな特徴として、一年目学生は「人間総合科学演習(以下演習)」と「英語」ならびに「情報とネットワーク」を必修科目として取得しなければならない。演習は与えられたテーマを選び、10人前後の小人数クラスで活発な意見交換を交え、大学生としての自覚を感じさせる最も重要な教科目である。また、英語教育に力を入れていることも本学の特徴の一つである。如何なる分野の専攻であっても、国際的に通用する武器としての英語習得が必須であることは万人の知るところである。

最近若者だけではなく、日本人全体がコミュニケーション能力に欠けているということが指摘されている。本学ではコミュニケーション運用能力向上に向けた「人間関係とコミュニケーション」が必修科目に挙げられているのも特徴と言えよう。

以上のように、人間総合科学科目群は、相手を知り、自分をも理解してもらえるような感性豊かな人間づくりに力を入れた分野である。担当者は国内は勿論のこと、世界のあちこちから迎え入れ

た優秀な教授陣で構成されていることもつけ加えさせていただきます。

## 新人学生部長の決意

学生部長  
伊藤 日出男

昨年4月の新入生合宿研修の折に、新人学生部長としての自分の名前を3回呼んで学生にアピールしました。お陰で学生たちとは親しくなれたような気がします。

学生部長という役職に対する私のイメージは、警察のお世話になった学生の貰い下げや、団体交渉の矢面に立つ教授、という程度のものでした。実際に就任してみると、学力優秀な学生が多い(という大方の評判ですが)せいか、出番がなく、いささか拍子抜けしています。その反面予想以上に大学運営に関わる仕事が多く、そちらの方ではかなりくたびれてきました。

そこで、昨秋結成された野球部の顧問を引き受けた機会に、まだノック位はできると思うので(思うだけ?)、今年はグラウンドに出て自らを鍛え直し、学生達には“文武両道”の精神を叩き込んでやろうと思っていますが、果たしてうまくいきますかどうか――。

## 学生・教職員と、 地域の人々とともに

附属図書館長  
中村 恵子

大学附属図書館は開学と同時に開館しました。管理・図書館棟の正面入り口から一番奥に位置し、

1階から3階までの3フロアの延べ面積は1,850㎡、一部吹き抜けになった建物です。

各フロアには検索コーナーがあり、図書館の所蔵資料検索のほかCO-ROM検索、インターネットによる検索を自由におこなうことができます。検索は教員の研究室や学生が自由に利用できる情報処理室からも可能です。1階は視聴覚教材、辞書関係、参考図書を配架し、2階は看護学・理学療法学・医学・社会福祉学の専門図書と雑誌類、3階は人間総合学科目関連の図書を配架しています。蔵書の初年度備品完了は平成12年までかかりますが、授業の進行に合わせて学生や教員から御意見を頂き、順次整備が整いつつあります。

開館時間は、月曜日から金曜日は9時～21時、授業がある土曜日にも開館し、教職員や学生のみなさんに活用して頂けるよう便宜を図っています。さらに10月から学外の方へも館内閲覧、複写のサービスを公開致しました。蔵書は平成11年度末には約4万冊、雑誌400種、視聴覚資料約700点です。

1年目は蔵書数も少なく、国内の図書館や情報センターから様々な情報を頂きながらも、手探りの状態で皆様へのサービスを致しております。図書館は大学の顔と云われるように、大学の学生、教職員にとって重要な施設設備であることはもちろんですが、地域の皆様にとりましても、利用しやすい図書館でありたいとの思いであります。利用者の皆様に一層のお力添えを頂き、図書館が果たす役割の充実に努めてまいりたいと考えております。

## 県民の保健医療・福祉の向上をめざして

健康科学研究研修センター  
研究研修センター長  
嗟峨井 勝

本学には、青森県の地域特性に即した保健医療・福祉に関する研究あるいは研修、教育を学際的、

総合的な立場から推進し、もって本学の学術研究水準の向上と地域における保健医療・福祉の向上に寄与することを目的に、健康科学研究研修センターが設置されています。

本センターには上記の目的を達成するために、研究開発科、研修科及び国際科の3科が設置され、これら各科が協力して、1) 特別共同研究をはじめとする各種研究に関する総合的な企画、立案、2) 他大学、研究機関等とのネットワークの形成、3) 研究発表会及び研究報告書の刊行、4) 公開講座、研究談話会、研修会等の企画及び実施、5) 国際交流に関する総合的企画等のために必要な事務、事業を行うこととしております。

現在、センターの職員はすべて大学教員の兼任で運営されていますが、本センターでは比較的大型の独自の研究費を持っており、全教員を対象に研究助成を行い、学外者との共同研究も積極的に推奨し、本学の学術研究水準の向上とそれらの成果を地域の保健医療・福祉の向上に役立てるべく努力しています。

独自の研究施設についても、平成13年度早々に開設すべく作業を進めています。さらに、本学では平成14年度末に第一回卒業生が誕生するのに合わせて大学院を開設する方向で各方面をお願いをしています。この大学院開設後にはそのソフト面での受け皿となり、より高度な研究、研修および教育の場となり、その成果を青森県民をはじめ広く世界に発信して行くことを目指して努力してまいります。県民各位の御指導御鞭撻をいただきますよう心からお願い申しあげる次第です。

## 研究研修センター 研究開発科について

健康科学研究研修センター  
研究開発科長  
上泉 和子

保健医療福祉は新しい世紀を前に、その価値観すら大きく変貌しようとしています。人々の生活、



健康、そして心の豊かさをもたらす、新しい知識の創造をめざし、研究開発がいま求められています。青森県立保健大学研究研修センター研究開発科は、本学の学術水準の向上、研究活動を通じた地域社会との連携、市民への研究成果の普及などをめざして設置され、研究活動の総合企画、大学と他の機関との共同研究の企画運営推進、研究ネットワークの形成、本学教員の研究に関する支援、若手研究者の育成、研究開発に関する情報発信などを役割としています。

本科では開学初年度から、研究開発、共同研究に積極的に取り組んできました。本学の健康科学特別研究においては、総合的、学際的研究である

「学術研究」、臨床現場等の諸問題を大学の教員と現場のスタッフが共同で行う「地域研究」、先駆的または独創的な研究で将来の発展を期待する「奨励研究」、そして青森県の保健福祉の行政施策に反映可能な成果を得ることを目的とした「行政課題研究」の各研究種別において、29題の共同研究がスタートしました。本学以外の共同研究者の所属は、他大学、保健医療福祉施設など多岐にわたり、また学際的な研究チームの編成も見られます。

本学の理念には『専門性を尊重しながら「連携・協調」をはかり、Human Care を実践・統合できる人材の育成を目指す』とあります。この理念を具現化するためには、まず本学の研究者である教員が連携・協調できる体制が必要です。お互いを知り、そして学際的な研究開発活動ができるように、今年度は教員の研究成果を発表しあう、「研究談話買い」を開催しました。この機会が若手研究者の育成につながることを期待し、今後も精力的に開催していく予定です。

またこれからの研究開発は、大学と地域の産業界、官界との連携を強化していくことが求められています。本学教員の研究成果を産業開発等に資するよう、大学研究シーズンフォーラムなどに参加してきましたが、これからも研究成果を積極的に勧めていきたいと思えます。

2000年は、研究開発事業をさらにすすめると共に、研究者への支援をしていきます。こうした活動を通して市民の健康の向上に貢献していきたい

と考えています。

## 研修科の事業内容について

健康科学研究研修センター  
研修科長

米澤 國吉

青森県立保健大学「健康科学研究研修センター」の一つの科である研修科の事業概要の紹介をもって研修科長のご挨拶と致します。

健康科学研究研修センターは本県の地域特性に即した保健・医療・福祉の向上に寄与する研究を様々な分野から総合的に取り組むこと、さらに研究成果を基に、現場で働く専門職の方々の技術向上のための研修、講座の開催など県民の生涯学習のニーズに応えていくこと、広く世界の人々と交流を図ることなどを目的として設置しております。

研修科では、保健・医療・福祉に従事する職員の専門性の向上を主な目的として「教育・研修の総合的企画」「講座などの開催」「生涯教育推進団体などとの連携事業の推進」「研修部門に関する情報発信」等の研修事業を展開したいと考えております。初年度の事業として県民の高い関心事である介護保険をテーマとした研修会を11月本学で実施しました。会では日本福祉大学の宮田和明教授が「介護保険制度とこれからの社会福祉」と題し講演、県高齢福祉課の若宮謙一郎総括副参事から「青森県における介護保険の準備状況」についての報告がありました。300人の参加者からは「難しい内容にもかかわらず、とても分かりやすかった」などの感想が寄せられました。研修科のこれからの事業として、保健・医療・福祉に関し継続的な大小の研修会・研究会の開催やそれらの内容を整理した出版活動も予定したいと考えております。研究研修センター研修科の事業へのご支援とご協力を宜しくお願い致します。



## 国際化に向けて

健康科学研究研修センター  
国際科長  
赤坂 和雄

本学における国際科の役割として次の二つが考えられる。一つは、人と人との交流を目的とした、いわゆる国際的な文化交流。もう一つは本学の専門分野における研究者の国際会議、学会などを含めた海外諸機関ならびに専門分野研究者との交流が上げられる。

国際的な文化交流に関しては、他大学あるいは他の研究諸機関などで行われているような友好的な交流が主となる。この中には学生の海外派遣と受け入れ、あるいは海外研修、留学などの啓蒙、研究者の交換なども考えられる。2000年夏から始まるプログラムだが、English Communication（選択英語科目）履修学生は、モナシュ大学（オーストラリア）で現地でのホームステイを体験し、英語の研修ならびにそれぞれ専門分野の諸機関での研修が予定されている。今後はこれらも国際交流の大きな柱になると考えられる。

現代ではあらゆる分野での研究を、地球的な規模で考え、その過程で、世界の研究者との交流が余儀なくされてきているのは否定できない。そういう中での研究者同士の国際的交流を推進していくことも、国際科に科せられた大きな役割の一つと考える。

とは言え、本学はまだ開学したばかりで、すべての理想を追及することは不可能である。従って、まず出来ることから始めて行くことが良策と考える。国際的交流とは所詮、人と人の交流に他ならない。それらを考慮して、2000年度は国際シンポジウムの開催を含め、国内における他大学の国際交流活動を調査し、海外の大学、研究機関などとの友好関係の可能性を探ることになる。新しく生まれた青森県立保健大学の存在を国内は勿論のこと、海外の諸機関にも声高に知らしめる努力を惜しまず行動して行きたいと考えている。

## 青森県立保健大学 ユニフィケーションについて

看護学科教授  
上泉 和子

ヘルスケアプロフェッションの教育においては、教育・研究と実践とが有機的なつながりを持つことの重要性が指摘されています。学生は実践の場での実習をとおして多くの内容を学習するのであって、実践の場で行われる保健医療福祉のサービスの質が学生の学習に大きく影響を及ぼします。ユニフィケーションとは、実践と教育が連携された組織になっているモデルで、大学教育と実践との連携と協働を通して、より高い実践の提供ならびに質の高い教育の提供をめざして考え出されたものです。

本学においても、より質の高い教育の提供をめざし、開学前から青森県立中央病院と勉強会を持ち、外来での看護相談室の企画等を行ってきました。開学後は、平成11年6月から大学教員が青森県技術吏員としての兼職辞令をもらい、組織的なユニフィケーションを開始しました。

ユニフィケーションの目的は、(1)学生に実践的・現実的教育を提供する、(2)実践の向上とケアやサービスの改善をめざす、(3)適切な臨床研究を促進、刺激する、の3つがあります。具体的には、(1)臨床実習指導、(2)実践へのコンサルテーション、(3)合同事例分析会、(4)共同研究、(5)継続教育への参加、などの機能が考えられます。

本年度ユニフィケーションとして活動している6名の教員と活動の領域をご紹介します。まだ成果を述べる段階ではありませんが、実質的なスタッフとしての貢献のみならず、実習受け入れ姿勢の変化などが見られているようです。

今後はユニフィケーションの評価について研究的に取り組むことや、病院スタッフとの合同会議の開催等を通してユニフィケーションの浸透を図っていきたいと思っています。



田嶋博一 (看護学科教授)	青森県立中央病院精神科外来にて外来診療を実施。精神保健福祉センターで実習の準備中。
藤井博英 (看護学科助教授)	青森県立つくしが丘病院にて研究指導および共同研究を実施中。
中村恵子 (看護学科教授)	青森県立中央病院救命救急センターにて、主にコンサルテーションを実施。
上泉和子 (看護学科教授)	青森県立中央病院看護局にて2000年問題への対応、医療機能評価の準備等を実施。
細川満子 (看護学科教授)	青森県立中央病院看護相談室にて、相談活動、退院患者への社会資源活用相談、看護職への継続看護についての指導等を実施。
江西一成 (理学療法学科助教授)	青森県立中央病院リハビリテーション部においてリハビリ訓練に従事。また看護職への呼吸改善法の指導を実施。

## 大学事務局紹介

青森県立保健大学 事務局	総務課	庶務担当 内線2005 直通765-2005	教職員の服務、県議会、学長等の秘書業務、福利厚生、給与、共済、旅費、報酬、契約(担当に係るものに限る)、文書管理、大学施設管理、教員公舎管理、教職員及び学生の健康管理等
		経理担当 内線2006 直通765-2006	予算・決算、収入・支出、現金出納管理、教員研究費管理、諸契約(担当に係るものを除く)物品購入、財産管理等
	企画情報課	企画担当 内線2009 直通765-2009	教授会、部局長会議等、学則、諸規定、健康科学研究研修センター(共同研究費等)等
		情報担当 内線2013 直通765-2013	情報システム企画開発・運営・管理等
		図書担当 内線2011 直通765-2011	図書資料購入、閲覧・貸出・整理、レファラン ス等
	教務学生課	教務担当 内線2008 直通765-2008	カリキュラム・時間割編成、履修、試験成績、実験実習、教材、教員採用、非常勤講師、卒業式等
		学生担当 内線2007 直通765-2007	学生の厚生補導、証明書発行、奨学金、学生相談、学生団体、入学試験、入学式、就職等



# 開学以来の主な行事

入学式



新入生宿泊研修







(車いすの体験)

## オープンキャンパス

(進学相談コーナー)



## 大学祭



## 開学以来の主な行事

- 平成11年4月1日  
辞令交付式
- 4月8日  
入学式
- 4月9日～10日  
新入生宿泊研修
- 6月4日  
開学記念式典
- 7月31日  
オープンキャンパス (2回目開催は  
10月15日・大学祭同時開催)
- 8月17日～20日  
大学進学相談会 (青森市・函館市外5市)
- 9月18日  
看護学科オープンキャンパス
- 10月2日～3日  
公開講座開催 (計4回開催)
- 10月15日～18日  
大学祭
- 11月16日  
県立保健大学健康科学研究研修センター研修会
- 11月20日  
特別選抜入学試験
- 平成12年2月25日  
一般選抜前期試験
- 3月12日  
一般選抜後期試験



## 多くの出会いを経験しながら

看護学科助手 板野 優子

看護学科の上泉教授を中心とした医療技術評価総合研究／看護必要度の研究の一端として、この度、カナダ・オンタリオ州のマクマスター大学と、アメリカ・コネチカット州のエール大学の看護学部を訪れる事になった。

まず、マクマスター大学を訪問した。リサーチユニットに在籍し、バウマン看護学科長の指導を受けながら、カナダでのリストラクチャリング後の看護人事についてを研究した。私が訪れたのは、カナダで一番美しいとされる紅葉の季節で、実際、カナディアンメイブルのオレンジは見事だった。しかし、季節の移り変わりは早く11月初旬には雪が降ってきた。

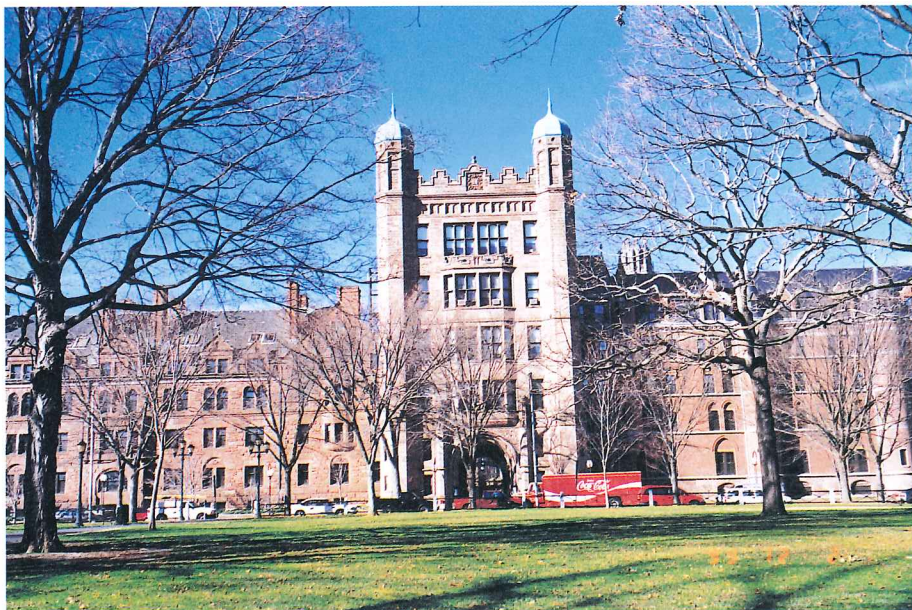
生活面では、中国系の人が多く、いろいろな発音の英語が飛び交うというお国柄からか、私もカナダ人であるかのようにカナダに溶け込んでいたように思う。食事もバラエティに富んでおいしかった。また、物価が安いので、海外留学を考えている方には、寒さを除けば、オンタリオ州は結構住みやすい所だと思う。



エール大学名誉教授ドナ・ディアーズさんと看護学部の受付にて

続いて、アメリカでは、エール大学の名誉教授であるドナ・ディアーズさんの下で、Diagnosis Related Groups と看護の関係について学んでいる。エール大学は、世界的にも有名な大学である。建物は石作りで、伝統があり、厳かな感じだ。施設内は静かで、コンピュータ設備も整い、勉強する人にとってはよい環境だと思う。但し、治安の悪い地域の近くなので、建物の中に入るのには鍵が必要である。

今回は、面識のない人に手紙を書き、訪問を受け入れてもらったのだが、私の出会った方々は、皆、親切で素敵な人だった。看護職（医療）を誇りに思っている人に悪い人はいないのかもしれない。学生のみなさんも是非いろいろな経験をしてください。See you soon.



エール大学の校舎の一部



## [メルボルン]

人間総合科学科目主任教授  
赤坂 和雄  
人間総合科学科目教授  
ノエル・フクシマ  
(English Communication担当)

平成12年にその1回目が予定されている当学人間総合科学科目の必修選択科目English Communicationの集中英語コースはオーストラリアで行われることになった。そのための教育機関として2つの大学が最終候補に上がっていたが、我々はそのどちらを選ぶべきかを定めるために8月の夏期休暇を利用して現地調査に赴いた。2大学の所在地であるメルボルン市では約一週間に亘って両大学の視察、関係者との会談、ホームステイ先の訪問等を行ったが、その結果、留学生、特に日本からの短期語学留学生を受け入れる姿勢において完璧に近いシステムとサービス体制を確立しているモナシュ大学を選ぶことにした。メルボルン市が学習環境や治安の面で優れている点も重視した。

7つのキャンパス、11の学部、47,000人の大学人口を擁するモナシュ大学は、海外の約60の大学と国際交流を行っているが、アジア諸国からの留学生のための各種プログラムの企画、マーケティング、調整、管理はAACE(Australia-Asia Contact in Education)が行っている。1991年の設立以来、既に4000以上のプログラムを成功させているという。我々がAACE事務局を訪問した際に紹介された15、6人のスタッフ中5人は日本語と日本文化に通じたbilingualであった。良質のホームステイ先の確保を専門に行っているスタッフもいた。



集中英語コースが行われる  
モナシュ大学ベニンシュラ・  
キャンパス



典型的なホームステイ先の家族  
(2人の幼児と左はノエル教授)



我々が帰国した2か月後の10月末、モナシュ大学のMUELC(Monash University English Language Centre) 英語プログラム企画総責任者である教育学博士Dr David Walton が来青した。その際博士は本学の全英語クラスの授業を参観し、学生たちと言葉を交しながら、来年の青森県立保健大学留学生用特別英語プログラム作成のための構想を練っていた。

ホームステイ先の家屋の全面  
(入り口近くに立っているのはデビッド・ウォルトン博士と赤坂教授)





## 青年の船体験記

### 21世紀への旅に寄せて

看護学科1年 齊藤 美栄子

私は平成11年8月30日から9月10日まで行われた「青森県青年の船」に参加しました。参加したきっかけは、青森県について多く学びたいということと、県内・海外に友達をたくさん作りたいたいということでした。そしてたくさんの期待を胸に、私は大海原へと旅立ちました。

出航2日目の朝、私が一番恐れていた事が起きてしまいました。「船酔い」をしてしまったのです。案の定、その日の午前中船室で休んでしまいました。このまま良くなるのではないかという不安に襲われましたが、午後には元気を取り戻すことができました。それ以来「船酔い」に悩まされることはありませんでした。

旅の中での数々の体験の中で特に印象に残っているのは、木村守男青森県知事にお会いできたことです。木村知事には本大学の入学式の時に初めてお目にかかりました。その時、青森に来たばかりの私にとってはとても印象的でした。今回はさらに驚くべき体験をしました。私は何と木村知事の講話の司会という大役を務めることとなったのです。

本番当日、私はとても緊張した面持ちで司会を務めていました。その時なぜか木村知事が身近な存在に思えてきたのです。そして講話後の昼食で、木村知事と会話をする機会を得、その上私と一緒に写真に写る

ことを快く引き受けて下さいました。何と光栄なんでしょう。私はとても感激しました。木村知事はとても優しい人柄だったので、もしかしたら私の父を重ねて見ていたのかもしれない。

もちろん、今回の旅で体



験した事はこれだけではありません。言葉で言い尽くせない程の感動と喜びを私に与えてくれました。今後はこの「宝物」を大切にしながら、もっと磨いていきたいと思っています。

### よかったこと

看護学科1年 三上 穂々乃

今回一番の財産となったものは何といっても、「みなさんがとてもいい人達で、彼等と出会えた」ということです。船に乗ってから、これは青森県主催の集団ねるとんだ、ということを知り、軽くショックを受けました。よくよく考えてみれば（対象年齢等）そうかもしれません。（平均25～28才）だから始めの方はこの年齢差やそれによる価値観の違いからこの人達とは絶対仲良くなれないと思ったし、彼等から見ても「こんな茶・金髪の子とどう接していいかわからない」という感じでした。しかし12日間も世間から孤立した環境でずっと一緒にいてみると、意外と何とかなるものです。私的には社会人としてのいろいろな話、考え方を聞けてとても勉強になったし、自分の考え方の甘さや生きてく上でもっと深く考えなければいけないことがいっぱいあるということを知りました。そうかといっても、お酒の力もあってか、皆さん底なしに明るく元気で毎晩毎晩騒ぎまくっていて、変に尊敬してしまっただけです。船を下りた後も、会ったり遊びに連れていってもらったりしてもらって、本当にありがたい限りです。私も仲間として認めてくれたことに…。もちろん、万里長城・仏国寺等の異文化にふれることができたことや、中国・韓国語のついたお菓子をいっぱい買えたこともとっても幸せでした。今でも、本当にいい体験をしたといえる出来事だったに違いありません。





# 大学祭を顧みて

## 若者の底力をみる

大学祭プロジェクトチーム代表  
(看護学科教授)

田崎 博一

時を二十数年遡ると私自身の「大学祭」体験がある。当時は学園紛争の嵐が過ぎ去り、挫折感と個人主義、復活と希望といったさまざまな思いを背景に大学がその機能を取り戻し、動き出そうとしていた時代であった。毎年、この季節になると、私は本番の1か月ほど前から準備に没頭し、学業はそこそこにしてエネルギーのほとんどを大学祭に注いでいた。秋の日差しと銀杏の枯葉、謄写版のインクの匂いが懐かしくよみがえる。ところで、私自身の大学祭に関する記憶のどこを探しても教官の姿は出てこない。「大学祭は学生のもの」と誰もが考えていたし、学生が最初から最後まで責任を持って運営したように思う。

さて、時を今年に戻そう。学事歴を見ると大学祭の日程も決まっており、春先から気になっていたが、「大学祭は学生のもの」という考えから抜け出すことができないまま、夏も過ぎた。学生委員会でも、何度か話題になったが、本格的に動き出したのは夏休み明けの9月である。全学的なプロジェクトとして、教官を含めたチームが構成されたが、実質的には学生主体で運営された。私自身は、介入は最低限にと考え、“学生の実行委員会”のサポートに徹した。準備期間がきわめて短い中、どこまでやれるかは正直なところ心配したが、結果的には杞憂だったようだ。近所の人、子どもたち、高校生、隣の老人ホームの利用者などたくさんの方が訪れてくれた。そして、主役の学生も楽しそうであった。それが何よりである。もちろん、来年以降への課題は多々あるが、第一回としては十分な内容だったと思う。学生諸君は収益の一部を台湾地震義援金に拠出したという。「若者には底力がある」という思いを新たにすることができた。

## 大学祭を顧みて

大学祭実行委員会委員長  
(看護学科1年)

小丹枝 賢

去る平成11年10月16日、17日に第1回大学祭～輝青祭～が行われた。私はいつの間にか「大学祭実行委員会委員長」として関わる事になったのだが、正直本当に開催できるのであろうか不安であった。10月に大学祭が行われるのにも関わらず取り組み始めたのが夏休み明けの9月末ごろ。何にも無い所にポイツと捨てられたような状態からスタートを切った。さらに最初の頃は会議の召集をかけても満足に出席者が集まらない。学生のあまりの無関心さにやきもきさせられ「これでは今年の開催は無理だな」と考えていたが、回数を追う毎に次第にまとまり始め、何とか大学祭としての体裁を整え、開催に至ることができた。しかしそこに行き着くまでにそれ相応の負担を強いられることとなった。授業以外の時間のほとんどを大学祭の準備に奪われ、満足に予習することもかなわず、休むことさえままならない状態が続いた。それでも積極的に参加してくれた少数の人やプログラムにも書いた友人、事務局の担当の方がいたからこそ、なんとか自分の責務をまっとうするに至ったと思う。これらの人達にはどれだけ感謝の言葉を述べても足りないくらいである。決して長いとはいえない準備期間や、一年目であるということ considering ならばよくやったと言えると思う。その時期の最低気温を下回るような低温でかつ悪天候の中、多数の来校者がみられたし、模擬店のほうも盛況で調理に間に合わない所も出たというから本当に良かった。ただ当然のごとく問題点は山積みとなって残ったが、反省会を経て解消したので来年度は今年以上に困る事はないと思う。これら今年の問題点・反省点を踏まえた上で十分な準備期間と綿密な計画をもって臨めば、来年の大学祭は今年以上の成功を収められると確信している。

## 公開講座開催実績

### 第1回：平成11年10月2日(土)

- ◆テーマ/「スポーツと健康と活性酸素」 講師/嵯峨井勝（人間総合科学科目教授）
- ◆テーマ/「高血圧の一次予防としての薄味のすすめ」 講師/竹森幸一（看護学科教授）

### 第2回：平成11年10月16日(土) (大学祭)

- ◆テーマ/「私とマラソンと陶芸と」 講師/丘みつ子（俳優・陶芸家）
- ◆テーマ/「私とテニスと子どもたちと」 講師/吉田(沢松)和子（元プロテニスプレーヤー）

### 第3回：平成11年10月23日(土)

- ◆テーマ/「障害者の社会参加とスポーツ」 講師/吉川公章（社会福祉学科講師）
- ◆テーマ/「よく歩けば、からだの機能が高まる」 講師/吉岡利忠（副学長/理学療法学科教授）

### 第4回：平成11年10月30日(土)

- ◆テーマ/「家族のライフスタイルと運動習慣」 講師/山本春江（看護学科助教授）
- ◆テーマ/「運動しなさいと言われたが、どうすればいいの!？」 講師/三浦雅史（理学療法学科助手）

- ◆入場者数（第1回145名、第2回243名、第3回132名、第4回136名）計656名
- ◆修了証交付者数 90名



第2回公開講座での丘みつ子講師と吉田和子講師



# 青森県立保健大学健康科学研究研修センター 研修会開催実績

日時：平成11年11月13日(土) 13:00～16:00

- ◆講演「介護保険制度とこれからの社会福祉」 宮田 和明／日本福祉大学教授(前副学長)
- ◆現状報告「青森県における介護保険の準備状況」 若宮兼一郎／青森県高齢福祉課総括副参事(介護保健担当)

## 学会開催案内

1	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学会長・大会委員長 赤坂和雄教授</li> <li>●学会名 国際リスニング学会 (International Listening Association)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●時期 平成12年8月3日～4日</li> <li>●会場 青森県立保健大学</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学会長・大会委員長 上泉和子教授</li> <li>●学会名 日本看護管理学会第4回年次大会</li> <li>●メインテーマ 「ケアの時代の看護管理」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●時期 平成12年8月25日～26日</li> <li>●会場 青森県立保健大学</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学会長・大会委員長 新道幸惠学長</li> <li>●学会名 日本災害看護学会第2回年次大会</li> <li>●メインテーマ 「災害看護学の萌芽～実践知から理論知へ～」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●時期 平成12年8月27日</li> <li>●会場 青森県立保健大学</li> </ul>
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学会長・大会委員長 赤坂和雄教授</li> <li>●学会名 日本コミュニケーション学会東北支部大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●時期 平成12年10月又は11月</li> <li>●会場 青森県立保健大学</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学会長・大会委員長 中村恵子教授</li> <li>●学会名 第3回日本救急看護学会学術集会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●時期 平成13年10月</li> <li>●会場 青森県立保健大学</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学会長・大会委員長 内山三郎教授</li> <li>●学会名 日本国際保健医療学会第17回大会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●時期 平成14年8月</li> <li>●会場 青森県立保健大学</li> </ul>



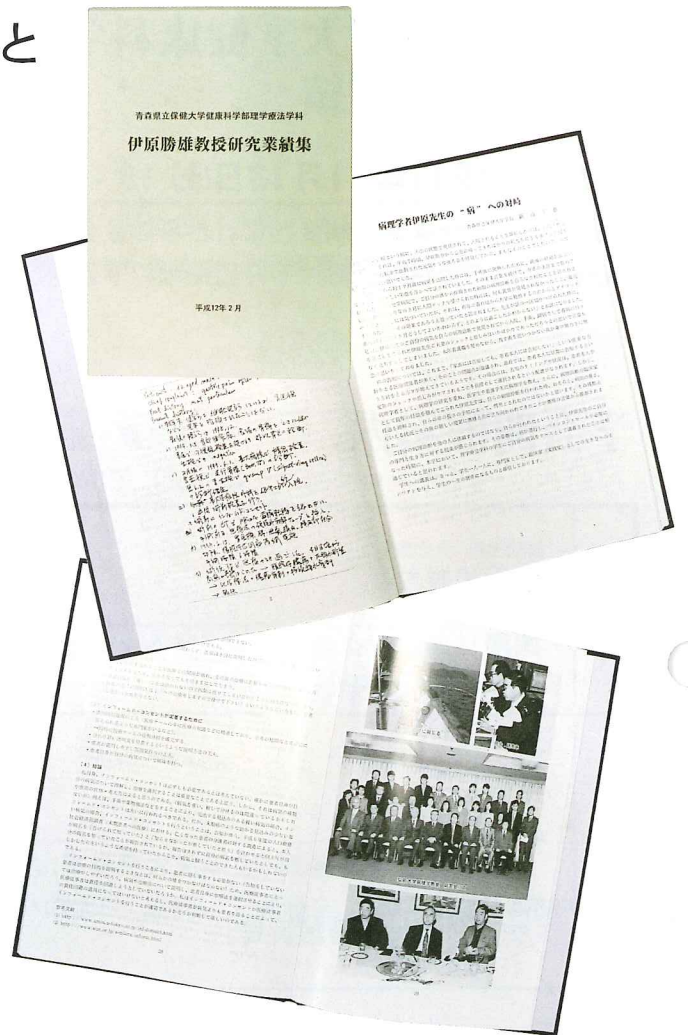
## 伊原勝雄先生のこと

理学療法学科長  
伊藤日出男

本学教職員の中で伊原勝雄教授について知っている人はそれ程多くないと思います。伊原先生は前期の解剖学の授業で1回講義の後、胃癌のため弘前大学病院に入院されましたが、それきり12月17日に帰らぬ人となってしまったからです。現職教授ということで、12月22日に本学と弘前大学病理学第一教室同窓会、それに伊原家との合同葬を行いお見送りしました。

生前、入院中の伊原先生から頂いた手紙の中に「万が一退院できて講義できればと夢みて夜を過ごしております」という文面が契機となって、後期の担当科目である「一般臨床医学」の講義に1回だけきて頂きました。10月21日の講義当日は、大学病院側の協力で医師が同乗するリフト付きバスの最初の使用者として、私たちは先生を万全の態勢で迎えました。心配した途中で急変するようなことはなく、伊原先生は悠々と(?)窓外の景色を眺めているように見受けられました。さすがに、講義中は体力の消耗が激しく、講義時間は正味20分でした。しかし、学生には事前にレジュメを渡されていたこともあって、ポイントをほぼ正確に把握したことが講義後のレポートから知ることができました。また、車椅子上の伊原先生のお姿から、医療人としての生きかたについて学生達は強烈な印象を受けたように見受けられました。

伊原先生は病理学者として活躍されただけでなく、医学教育を始め看護教育にも大きく貢献してこられました。このような教育研究者としての伊原先生の研究足跡を記録にとどめておくことは、後輩の保健医療福祉専門職にとっても大きな励みになると思われましたので、理学療法学科では先生のご了解を得て残った研究費をつぎ込んで「伊原勝雄教授研究業績集」を上梓しました。



業績集は約50頁、箱入りの立派なもので、内容は伊原先生の経歴、研究業績を中心に、関係者の方々からの寄稿文と、学生のレポートや写真等も加えました。残念ながら、先生には初稿しかお届けできませんでしたが、つい先日、2月17日の命日に完成し、翌日研究室の残務整理にこられた奥様にお渡しすることができました。

「こんな立派な業績集を作っていただいて有難うございました」と独特の身をよじるようにして笑う伊原先生のお姿が目につかぶようです。

(業績集は各学科長にも贈呈していますので、関心のある方はご覧頂ければと思います)



# 委員会記録

## ■図書館運営委員会

図書館運営委員会は運営委員会規程第2条に基づき8名の委員で構成する。月1回の会議を開催し、開学間もない図書館の運営につき審議した。その主な内容は

- 1) 図書の選定方法の決定、2) 新規購入図書、雑誌の選定、3) 学外者への公開方法の決定、4) 学外者への公開の通知、5) 教員研究費図書のオンラインによる発注開始、7) 教員用コピー機の設置、8) 土曜日の開館（本年度は授業が行われている日）9) 指定図書の取り扱い等である。

継続検討は24時間の開館についてであるが、この件は設備の問題が大きく単純な結論は出せない。現在は他の図書館の資料を収集しており、それらを参考に今後も継続審議をしてゆかねばならない課題である。

## ■入学試験委員会

11.5.8/第1回開催

- (1) 平成12年度一般選抜試験及び二次試験科目の検討
- (2) オープンキャンパスの実施を決定→意見を広報委員会へ
- (3) 青森県高等学校進路指導主事研究協議会の出席者を決定
- (4) 北東北ガイダンスセミナー実施委員会委員(事前推薦)の報告

11.5.21/第2回（臨時会議）開催

- (1) 大学入試センター試験利用科目の確認

11.6.19/第3回開催

- (1) 平成12年度「入学者選抜要項」の作成
- (2) 大学説明会の実施決定（県内6か所、県外6か所）
- (3) 入学者選抜試験に係る情報公開について検討

11.8.29/第4回開催

- (1) 平成12年度「入学者選抜要項」の作成
- (2) 入試実施委員会を立ち上げ
- (3) AO入試への取り組みについて

11.10.31/第5回開催

- (1) 特別選抜試験の面接評価基準について検討
- (2) 入試実施委員会で作成した特別選抜試験実施要項を検討

11.12.1/第6回開催

- (1) 特別選抜試験の実施結果について

## ■学生委員会

4月1日「第1回学生委員会（教務委員会と合同）」

委員長代行、定例会議等の決定

4月10日～11日「新入生宿泊ガイダンス（教務委員会と合同運営）」

4月10日「第1回学生相談専門部会」代表者の決定、学生相談室の確保等

4月28日「第2回学生委員会」宿泊ガイダンスの反省、学生の防犯、サークル活動等

5月17日「第3回学生委員会」日本育英会奨学生の推薦、学生健康管理専門部会、セクシャルハラスメント対策検討委員会、福利厚生棟専門部会の設置、VOICEボックスの設置等

6月10日「第4回学生委員会」日本育英奨学金、授業料免除者の推薦等

6月29日「オープンキャンパス・プロジェクトチーム」設置

7月12日「学生自治会（仮称）設立準備代表者会議」

7月14日「第5回学生委員会」セクシャルハラスメント対策答申案、学生自治会設立準備委員会、サークル代表委員会、VOICEボックス報告、福利厚生棟専門部会報告等

7月19日「第1回健康管理専門部会」部会長決定、学生健康管理年間計画、ツベルクリン反応検査等

7月21日「セクシャルハラスメント対策指針(第1弾)報告」

7月31日「第1回オープンキャンパス」

8月2日～4日「第2回学校心理カウンセラー研修講座」

(ホテルフラシオン青山/東京)に津内口保健嘱託員出席

9月14日「第6回学生委員会」大学祭プロジェクトチーム設置、学生自治会準備委員会報告

10月16日「セクシャルハラスメント(第2弾)答申」

10月16日～17日「第1回大学祭・輝青祭」の開催

10月20日「第2回健康管理専門部会」ツベルクリン反応検査結果について

10月27日～29日「第37回全国厚生補導研究集会」(北九州国際会議場)に入江教授が出席

11月14日～17日「第37回全国学生相談研修会」(東京国際フォーラム)に安田助教授が出席

11月16日「第7回学生委員会」自然災害時の連絡体制、日本育英会奨学生追加募集等

12月7日「第8回学生委員会」南部地方の暴風雨災害に係る学生の調査結果について、授業(後期)の減免等について

12月21日「第3回健康管理専門部会」保健室における傷病統計について、平成12年度各種検診の委託申込みについて

12月27日「オープンキャンパス・プロジェクトチーム反省会」

## ■教務委員会

4月1日に第1回開催、計7回開催

主な決定事項/宿泊ガイダンス実施計画、11年度後期時間割案、既修得単位の認定、11年度前期定期試験実施計画、定期試験実施に係る申し合わせ、11年前期集中講義の対応、11年度後期履修ガイダンス実施計画、転学科取扱規程案、科目等履修生募集計画

## ■将来構想検討委員会

5月8日に第1回開催、計3回開催

主な決定事項/大学院専門部会及び編入学専門部会の設置、大学院開設時期と作業スケジュール、編入学制度導入のスケジュール

## ■公開講座委員会

5月8日に第1回開催、専門計4回開催

主な審議事項/今年度の公開講座について、講師及びテーマを選定し、開催方針等を決定し、10月に4回の公開講座(延べ656人参加)を開催した。

## ■出版物検討委員会

12月7日に第1回開催、計2回開催

主な審議事項等/本学の紀要、業績集、年報、学報、大学広報誌、英文概要(大学案内)等各種大学出版物についての総合的な調整を行うことを目的に組織されたものであり、各担当委員会等の長及び本学の部局長による意見交換がなされた。

## ■紀要編集委員会

4月19日に第1回開催、計4回開催

主な決定事項/紀要の内容について、年度内に第1巻第1号、2号の刊行を決定



## ■情報システム委員会

4月27日に第1回開催、計6回開催  
主な決定事項／ホームページの運用に関する規程、電子メール利用上の留意事項等決定

## ■広報委員会

4月22日に第1回開催、計8回開催  
主な決定事項／大学案内の作成について、広報用ビデオの作成について、学内広報誌の作成について、入試広報の実施について

## ■評価委員会

7月6日に第1回開催、計2回開催  
主な審議事項等／管理運営専門部会、教育専門部会及び研究専門部会の3つの専門部会を組織し、今年度は資料収集を中心に活動していくこととした。

## ■倫理委員会

4月14日に第1回開催、計5回開催  
主な決定事項／健康科学特別研究の倫理的側面からの検討・他大学倫理委員会の倫理規程の収集、及び本学の倫理委員会規程の決定・動物実験に関する他大学の倫理規程の収集

## ■健康科学研究研修センター 運営委員会

4月1日に第1回開催、計3回開催(このほかにセンター全体会議を2回開催。センター3科の活動のあり方等について検討した)  
主な決定事項等／健康科学特別研究募集要領の決定、同特別研究の募集及び審査等を実施し29件が採択された。

## ■健康科学研究研修センター 研究開発科委員会

5月21日に第1回開催、計9回開催  
主な決定事項／行政施策研究募集要領の決定、同研究の募集及び審査を実施し、2件が採択された。研究談話会を企画し、2回実施した。本学の文部省科学研究費補助金申請は27件。

## ■健康科学研究研修センター 研修科委員会

6月14日に第1回開催、計7回開催  
主な決定事項等／今後のセンター研修会について、講師及びテーマを選定し、開催方針等を決定。11月13日に開催した(278人参加)

## ■健康科学研究研修センター 国際科委員会

6月7日に第1回開催、計2回開催。国際科委員会の当面及び将来的な活動等について意見交換がなされた。

## 広報誌名「活彩！保健大学だより」について

本誌の名称を全教職員に公募したところ、多数の応募があり、選考の結果、表紙にありますように「活彩！保健大学だより」が選ばれました。応募された方には厚くお礼申し上げます。

### 編 集 後 記

青森県立保健大学広報誌《活彩！保健大学だより》の創刊号をお届けいたします。4月1日開学以来11か月が過ぎました。教職員並びに学生諸君の協力により、本学が順風満帆の航海に乗り出したことが本誌に述べられています。教育・研究の他に、オープンキャンパス、公開講座、大学祭等を通して、「地域に開かれた大学」を目指す活動に力が注がれています。本学の歴史の始まりをここに記録しますが、前史として、開学に向けての準備室の歴史があることを忘れてはなりません。

本誌をより良いものにするために、皆様の忌憚のないご意見をお聞かせ下さるようお願いいたします。(広報委員長/竹森幸一)

#### ◎広報委員会

竹森幸一、羽入辰郎、勘林秀行、八戸宏、伊藤貞一

#### ◎専門部会(広報記録担当)

井澤弘美、田中克枝、佐藤秀一、田中志子、

#### ◎事務担当

佐々木真也